

---

# **魔法戦記リリカルOO～不滅の狙撃手～**

チョコレートパフェ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記リリカル〇〇～不滅の狙撃手～

### 【NZコード】

NZ8973X

### 【作者名】

チョコレートパフ

### 【あらすじ】

成層圏の向こう側まで狙い撃つ男、コードネーム

『ロックオン・ストラトス』ことニール・ディランディ。

家族の仇であるサー・シェスとの戦いで命を落とした……はずだった。彼は新たな世界で目を覚ます。

そこで出会った一人の魔法少女。彼女と出会った時、ロックオンの新

たな戦いが始まる！！

作者の処女作です。ご都合主義、キャラ崩壊、原作ブレイクなどの要素を含んでいます。嫌いな人は回れ右で。

## プロローグ

『よお、お前ら満足かあ……こんな世界で?』

こんな事を言つてもしじうがない、ましてや答えが帰つて来ないことも解つてゐる。

だけど……聞かずにはいられなかつた。

両親を奪つたテロ。あんな事が当たり前に起つた世界で……。各地の紛争で人が次々と死んでいく。世界の人はそれを当たり前のように認識している。自分達には関係ないことだと。

自分達がよければそれでいいのかよ…………?

『……俺は嫌だね』

死が近づいているのがわかる。

だけど自然と恐怖は無い。

咎は受ける、そう決めていたから……。

走馬灯のように駆け巡る人生……そのなかで思つた。

何やつてたんだろうな、俺……。

思えば復讐の事ばかり考えていた気がする。今更ながら、少し……いや、かなり後悔した。

世界を変える、世界の為といって結局はテロが……この世界が憎かつただけだ。

弟の、ライルの生きる未来を守るためにといってソレスター・ビーングに入ったが、結局は復讐するための力を手に入れる為だったのかも知れない。

もし、やり直せるのなら復讐じゃなくて何かを……守るために……  
。

そう思った直後、俺は光に包まれた。

## 第1話 運命との出会い

朝日が田に当たる。時刻はまだ早朝、そんな時間にロックオンは田  
覚めた。

「あ～、こつ之間に寝ただ俺？」

眠そうな田を擦りながらロックオンは呟く。まだ起きなか意識  
があまり覚醒していないようだ。

とつあえず近くに川があったので顔を洗おうと歩きました。

「すいぶん綺麗な水だな……」

顔を洗つてる途中のロックオンが呟く。

こんなに川の水が綺麗なんて……そうロックオンは思ったのだ。  
だんだん意識が覚醒してくるとロックオンは急に手を止めた。水面  
に映つている自分の姿を凝視し信じられないとこつよつな顔をして  
いる。

「体が……縮んでる……？」

信じられないところにロックオンは呟く。  
なぜか体が小さくなっているのだ。

直に自分の体を見ても明らかに手足が短くなっている。

それどころか両の傷が消え視力も戻っている。眼帯もなくなっている。

「（あの眼帯……けつじつ気に入つてたんだけどな……）」

そんな事を考へている内にロックオンはあることを思つて出す。

「俺は……確か、あの時……」

顔を洗つたおかげでだいぶ頭がスッキリした。  
だが、頭がスッキリしたことで思い出したのだ。

自分は死んだはずだと。どうして生きてるんだ?  
考えても答えは見つからない。

百歩譲つてあの時生き延びたとしてこれは何処なんだ?

ここには確かに重力がある。そして空氣も……。

考えられるとすれば地球だがさつきまで宇宙にいたはずだ。そして  
なぜ体が小さくなっている?

数々の疑問が浮かぶが答えはみつからない。

答えがみつからないならとりあえず情報を集めるのが先決だ。  
彼は持ち前の前向きな性格からそう答えをだした。もともと考える  
のはあまり得意じゃないのだ。

思い立つたが吉田。やる気をだして歩きだそととしたとき……

ドーン――――――

「――?」

近くで爆発音がしたのだ。

ロックオンは何事かと音のしたほうへ走る。

「何!?」そこで見た光景は……  
なんといえばいいのか……怪物？ 化け物？  
そんな言葉が似合いそうな不気味な生物。

その化け物と金髪の少女が空を飛んで戦っているのだ。

「おーおー、マジかよ…………？」

思わずその光景に我が目を疑う。  
人が空を飛ぶなど聞いたことがない。  
しかもかなりのスピードだ。

人間が出せるスピードを遥かに越えている。

何や？ 電撃？ らしき物も出している。

おじや話で出てくんなよつた光景が田の前にあるのだ。

「なんだか……とんでもない」とになつてゐみたいだな……

また貧乏へじか……？

彼はため息を吐きながらそんな事を思つていた。

思考を引き戻して戦闘をみてみる。

戦闘は明らかに少女が押している。

戦闘のプロの自分じゃなくともやつぱりだらう。

かなり戦闘なれしているのがわかる。複数の化け物の攻撃をかわし、  
攻撃を仕掛けた。

圧倒的なスピードで複数の敵を手に持った鎌みたいなものでなぎ倒

している。

彼女は近接戦闘が得意なのだろう。戦い方もどこか刹那に似ている。化け物はどんどん数を減らしていく。

ロックオンは見とれていた。

彼女の強さに。その美しい戦いに。

だかすぐに思考を引き戻された。なぜなら……

「グアアアアアーー！」

「つーーー！」

なんと、化け物がこっちを向いたのだ。

そして猛スピードで「つーーー！」に向かってくる。

「つーーー！」

とつぞに回避動作をとつたが間に合わない。

「危ないーーー！」

「つちに気づいた少女が猛スピードでつちに向かってくる。

「バカ野郎、来るんじゃねえ！！」

だが彼女は止まらない。そのまま彼女は化け物の突進を受け止めた。  
だが彼女はそれで怪我をしたのか、腕から血が出ている。

「うっ…」

少女は痛そうに腕を抑える。

「おい、大丈夫か！？」

「大丈夫……です…」

ロックオンは少女に焦つたように聞くが少女は額に汗を搔きながら  
大丈夫だと答える。

「それより…早くここから離れてください」

そう言って少女は再び戦闘にもどる。

だが、先程までの少女と違い明らかに動きにキレがない。

当然だ。少女の傷は思ったより深いのか血を流しながら戦っている。

彼女の顔色はどんどん悪くなつていぐが、化け物のほうは疲れる素振りも見せない。

少女は次第に劣勢になつていぐ。

ロックオンはその光景を拳を握り締めながら見ていた。手からは血が滲んでいる。

目の前で少女が苦しんでいるところに何もできない……。

そんな自分がどうしようもなく情けなくて、昔の…家族を奪つたテロが脳裏によみがえつてきて……

だが、自分には力がないのだ。ただ見てくる」としかできない。

「(ちくしょう、また俺は何もできないのか……?) 「

ロックオンが自分の無力にうちひしがれていると、突然ポケットが光りだした。

「なんだ……?」

ロックオンは唖然となりながらもポケットの中を探る。そして光つていたものを取り出した。

それはペンダントのようなもので縁と白を基調とし金色のV字マー

クが目を惹く。といつかこの色は……

「デュナメス……？」

そつてデュナメスの色とまったく同じだ。

『よつやく氣づいてくれましたね、マスター ロックオン』

「うおわあーー！」

思わず大きな声を出してしまった。だが仕方ないだろう。  
デュナメスの色をしたペンダント？からいきなり声が聞こえたから  
だ。

「なんで喋るんだこれ！？ 通信機器かなんかなのか！？」

『違います。私はデバイスです』

「デバイス？」

ロックオンは聞き慣れない言葉に首を傾げる。  
その時ものすごい爆発音がした。  
反射的にそつちに振り向く。

田に映つたのは今にもやられてしまいそうな少女の姿だった。

「やべえ……」

『マスター・ロックオン、彼女を助けたいですか？』

今にもやられてしまった少女を心配しロックオンは叫んだが、いきなりデバイスに質問される。

「だれんのか…？」

『はい。マスター・ロックオンが今から私が言つことをやつてくれれば』

それを聞いたロックオンはすぐ口答えを返す。そこには一切の迷いもない。

「わかった。何をすればいい

『簡単です。ただ、デュナメス、セットアップと書いてください』

それだけでいいのかと疑問に思つたようだが、

あえて聞かず静かに、しかしビック力強さを感じさせる声でロックオンは言葉を紡いだ。

「了解だ。デュナメス、セットアップ」

直後、ロックオンは緑色の光に包まれた。

光が治ると緑と白を基調とした……デュナメスとまったく同じ色のバリアジャケットを身にまとっているロックオンが立っていた。

「これは……」

『説明をしなくても、わかりますよね？ 貴方なら』

「ああ、コイツはデュナメスとまったく同じだ……」

『そうです。私は、デュナメスですから』

GUNスナイパー・ライフルになつてているデュナメスがロックオンに言う。

ロックオンはその言葉に微笑を浮かべると、すぐにGUNスナイパー・ライフルを構えた。

「（体が小さくて、なんかしまらねえが……）」

ロックオンはそう思いながら口癖になつてゐる言葉を力強く言い放つた。

「デュナメス、目標を狙い撃つー！」

狙撃手は再び戦いに身を投じる。それはただ純粋に、守るために、戦い。

## 第2話 ロックオン・ストリートス（前編）

お気に入り登録をしてくださった方々ありがとうございました。

作者の暇潰しの妄想作品ですが、「こんなもんあつたな……」ぐらいの  
感じでよんでもらってください。

## 第2話 ロックオン・ストラトス

「そ、ソーヴィー！」

「ぐわやああああああ……」

少女……フュイト・テスター・ロッサは化け物の背後にまわり、そして切り裂いた。

彼女は高速戦闘のスペシャリストである。

まだ若いがその圧倒的なまでのスピードは後に『閃光』とまで呼ばれるようになる。

だが今の彼女はそのスピードをまるで活かせていない。

理由は腕の怪我にある。

フュイトはロックオンを庇い腕に重傷を負った。

その腕が痛くてスピードが出せないのである。

いくら実力は一流といっても彼女はまだ若い。

想定外の出来事……所謂『イレギュラー』があされば、実戦経験がありにも少ない彼女にはきついだろう。加えて腕の怪我である。

痛みで戦闘に集中できず、徐々に追い詰められていく。

頼みの綱のアルフは今、別のところで戦っている。

アルフはいろいろの異変に気づいたのかこちらに向かって来てくる。

使い魔と主人のリンクでフュイトの異変に気づいたようだ。

アルフは体術にも長け、特にそのサポート能力はかなりのものだ。アルフが来れば戦況は再び逆転する。

「（それまで……もちこたえないと……）」

フェイトはデバイス『バルディッシュ』を強く握り締めながら気合いを入れる。

足下に魔方陣が浮かび上がり、魔力がバルディッシュに集中する。

彼女は雷の魔力変換資質を持つている。集中した魔力は徐々に雷に変換されていく。

『サンダー……うつー？』

しかし突如フェイトは苦しそうにその場に膝をつく。腕の怪我とそれが原因のダメージの蓄積もあるが、それだけが理由ではないだろう。

フェイトはここ数日戦いの連続だ。そのうえ食事をまともに摂っていないのだ。いつ、動けなくなつたとしてもおかしくないのだ。

彼女は苦しそうに顔を歪めるがそこに……

『フェイト——つ……』

「アルフ！！」

彼女の使い魔、アルフが駆けつけたのだ。  
フェイトは嬉しそうに声をあげるがそこには

「フェイトっ！！ 後ろっ！！」

「えつ……？」

化け物が一斉に襲いかかったのだ。フェイトの気を抜いた瞬間を見逃さなかつたのだ。  
割りと頭の良い生き物なのだろう。

「へつ……？」

フェイトはかわそつとするが……、

「へつ……？」

体が動かないのだ。

化け物はそんなことお構い無しにフエイトに牙を剥ぐ。

フェイトはなんとか動こうとするが、体が何かに取りつかれたかのように動かない。今は飛んでいるのもやつとの状態だ。

「グギヤアアツー！」

「フロイトー！」

アルフがなんとか追い付いて防御しようと必死に走っている。だが  
駄目だ。

フェイトは諦めたかのように脱力した。

アルフは間に合いそうにないし、自分はまったく動けない。フェイトはアルフの顔を向けると笑顔で言った。

「今までありがとうございました……アルフ……。それと、ごめんね……」

アルフに笑顔で、しかしながら無理をした、そんな表情でフェイトはアルフに笑顔を向けている。

その表情からはアルフへの申し訳なさ、初めて感じる死への恐怖など様々な感情が映つていてる。

だが彼女は、死の寸前で……恐怖や悔しさよりも……感謝をとつ

た。

今まで一緒に頑張ってくれて、彼女を支えてくれた相棒への感謝をとつたのだ。

そして、謝罪した。

母のためとはいえかなり無理をさせてしまった。

そして…自分が死ぬことでアルフが悲しむことへの謝罪。

アルフはその言葉を聞いて涙が溢れ出した。

自分の主人が……というよりも自分にとつて妹のような、何よりも大事な存在の命が……今にも消えようとしている。

アルフにも悔しさや自分への怒りなど様々な感情があつたが、何よりもフェイトと離れたくない、フェイトを失いたくないといった感情が大きかった。

「フェイトオオオオつ！…！」

アルフはありつたけの声で叫ぶ。

叫んでも状況が変わるわけでもない。だけど叫ばずにはいられなかつた。

手を延ばしても全く届かない。

だけど何度も何度も手を延ばす。

フェイトにもアルフにもこの時間がまるでスローモーションのよう

に流れていのを感じた。

フェイトはみた。アルフの顔を。  
涙でぐしゃぐしゃになつてゐる。  
その顔を見ていると、罪悪感が沸いてきた。  
そして、思い出す。

母、フレシアの笑顔も。

もう一度優しく笑いかけてほしくて、優しい母に戻つてほしくて…  
ただ一生懸命戦つてきた。

母のことを、アルフの顔を思い出すと、死にたくないなつてきた。  
覚悟とは脆いものである。  
死にたくないと思つと、どうしようもなく恐くなつてきた。

しかし現実は残酷だ。

そんなフェイトの覚悟など知る由もない。

そして今までに一匹の化け物の牙がフェイトを舐め裂いたとしたとき……

ビシュウウン……

ドオオン……！

「ギャアアアアアアー……？」

「……えつ？」

アルフの横を桃色の閃光が通り抜け……化け物をあつといつ間に貫いた。

化け物は悲鳴をあげ絶命する。

フェイトは見た……そこには、力強い眼で化け物に狙いを定めている…………ロックオン・ストラトスの姿があつた。

「連中が相手だと、ハンティング気分だぜ……」

彼はそうぼやきながらも息もつかせぬ射撃で次々に化け物を倒していく。

化け物はあまりにも正確無比な射撃に声も出せないよつだ。

「あれは…………？」

アルフはそう呟きながら、へなへなと尻餅をつく。

アルフはロックオンの事をピンチに駆けつけたヒーローだと思つた。  
それほどさつきのタイミングが劇的過ぎるのだ。

「……ラストだ！！」

そう言つてトリガーをひく。  
化け物は跡形もなく爆発した。

ロックオンは全ての化け物を倒しおえると疲れたかのよつこため息  
を一つ。

「ふうっ…、なんとかなったな……」

そう言つて安心したのも束の間…………なんとフェイトが、力を使  
い果たしたかのように落下してきたのだ。  
おそらく緊張の糸が切れたのだろう。

ロックオンは一瞬焦るが、すぐに冷静になり……

「飛べるな？ デュナメス！！

『無論ですマスター』

そのやり取りの後、GNスナイパーライフルをGNピームピストルにし

ロックオンはフェイトの元へ走り出した。

走っている間に飛ぶイメージを作り、一気に空へと飛翔した。

何故か飛んだ時にGN粒子が出てきた。

いや、デコナメスそのものなのだから別に不思議じゃないだらう。

GN粒子の恩恵もあり、彼女の真下へと高速で移動し、そのままゆっくりと抱き抱えた。

「…ギリギリセーフってことだな……」

「あなたは……？」

「ロックオン・ストラトスだ。大丈夫か……？」

フェイトは戸惑ったように聞くが、ロックオンは笑顔で返した。その笑顔は、心底無事でよかつたという笑顔である。

「はい……ありがとうございました」

「何いってんだ…？」

俺のほうに助けてくれてありがとう

若干赤くなっている顔でフォイトはお礼を言った。

しかしロックオンはまたも笑顔で返した。

二人はとても優しい性格である。

事情がなれば人を傷つけたり、こんな戦いをすることは拒む筈だ。だからこそ自分よりも他人を心配するのだ。

ロックオンはゆっくりと揺らさないよう降りていく。

バリアジャケットの背中からGN粒子が出ている。そのGN粒子を浴びているフォイトは……

「温かい……」

そう言って安心したように意識を手放した。

ロックオンは少し戸惑つたが…笑顔で嬉しそうに、安心したような表情で寝息をたてている彼女を見て、

ロックオンもつられて笑顔になった。

下からこの光景をアルフが見ている。

GN粒子を纏いながら降りてくるロックオンと、その腕のなかで安

心したよつに眠つてゐるフェイト。

フェイトのあんな顔…本当に久しぶりに見たよつな気がする。

「ハハツ…」

アルフも釣られて笑顔になつた。

朝日に照らされた二人はとても綺麗で幻想的に見えた。

### 第3話 新たなる一步

空中……といつても地上から10メートルくらいだらうが、ロックオンはフェイトを抱き抱えながらゆっくりと地上に降りた。

長い茶髪が風になびいている。

見た目が子供なのにはぐく大人っぽく感じじる。

「なんか……結構疲れたな……」

ロックオンは呟く。

そのロックオンの問いに反応したのか首にぶら下げているペンダン  
ト…デュナメスがロックオンに説明する。

『マスター、それは貴方が魔力を大量に使ったからです。魔力を使つての初めての戦闘ですから疲れるのも無理はありません』

「魔力…………？」

『さつきの力のことです。貴方は魔力を消費し魔法を使って戦つたのです』

「魔法が……、そんなもののファンタジーの中だけだと思ったぜ……。  
けどだいたいわかつたぜ、魔力つづーのは無限じゃなくて、使いす  
ぎるとツケが体に来るってことか……」

『その通りです。ですが私はデュナメスがデバイス化した物ですか  
ら戦い方はすぐにわかつたようですね……、さすが元ガンダムマイス  
ター』

「なあ……お前は本当に……」

『ええそうです。私は貴方のそばでずっと戦っていました。しかし  
なぜ私がデバイスになつたかはわかりません。』

「そうか……、あ……そういうえばデバイスつて?..」

『魔力を行使するのに必要な武器みたいな物です。  
セットアップの声と共にバリアジャケットが展開されます。  
デバイス……つまり私がないと戦えないので注意してください』

「了解だ……」

そこで会話は途切れた。

ロックオンはとりあえず抱き抱えているフロイトを背中におぶる。

彼女はいまだに気持ち良さそうに寝息をたてている。

起きないようになるべく動かないようにしている。

体が小さくなつていて、彼女とあまり体格が変わらないのに何故か  
楽に背負える。

少し疑問に思つたが今はこっちのほうが先だと思考を戻し、デュナ  
メスに話しかけてみた。

「なあデュナメス……これからどうすればいいと思つ?」

デュナメスは少し間が空いた後、言葉を返した。

『……私達は今、どうこう状況にたたされているかよくわかりませ  
ん。

とりあえずあそこで未だに呆けている使い魔に話しかけてみてはどうで  
しょうか?』

「使い魔?」

『簡単にはいえば魔導師の使役する一種の人造生物です。』

彼女はちがつようですが……。よつはこの子の従者ですね』

「なるほどな……、主従関係か。じゃあこの子の知り合いで間違いねーって事だ」

『はい。まず間違いないでしょ』

確信を持つて言ったロックオンの言葉に、デュナメスも間違いないだろうと言つ。

ロックオンは彼女の所へ歩きだそうとしたが……

「ん……？」

なにかを踏んだような気がした。

とつあえず拾つてみる。

青い宝石のような物だ。ロックオンは普通なら特に興味を示さずにそのまま置いていくのだが、なぜかこれはここに置いといちゃいけない感じがしてとつあえずデュナメスの指示を仰ぐこととした。

『デュナメス……。こんな物を拾つたんだが、どうすればいいと思つ?』

『……よくわかりませんが、これは持っていたほうがいい気がします。とても危険な感じがするんです』

「あ……なんとなく俺もそう思つてたんだ」

ロックオンは険しい表情でその 青い宝石を睨み付けているが……

「あ～、やめだやめ……。考えるのはあんまり得意じゃねえんだ……」

…

そつまつていつもの穏やかな雰囲気に戻し青い宝石をポケットに入れる。

こんどこそ気を取り直したよつと歩きだした。ロックオンは背中で眠つてゐる少女を起しきなつに慎重に未だに呆けてゐる女性の所へと向かった。

「なあ……そこのあんた」

ロックオンはフェイトの使い魔…アルフに話しかけた。

「つーーーあ、あんたフェイトは、フェイトは大丈夫なのかい！？」

アルフはロックオンの問い合わせで我に帰ったのかかなり焦ったように聞いてくる。

「大丈夫だ…。命に別状はねえよ

「そ……そうかい。 よかつた」

アルフは心底安心したように、息をはぐ。

「だが少し怪我をしている。すぐに手当をしないと……」

ロックオンは少し申し訳なさそうな感じでアルフに言った。

「本当だ……。すぐに家に戻つて手当でしないと……」

「俺も手伝つていいか？」ううのは人数が多いほうがいいしな

……」「

そのロックオンの言葉にアルフは少し考える。フェイトを助けてくれたとはいえ完全に信用は出来ない。

この男は魔法を使っていた。

それには強さ……はつきり言って脅威である。

しかし管理局の人間とも思えない。まだ子供だし、何より雰囲気がそういう感じじゃないのだ。

なんか誰とでも仲良くなれそうなそんな雰囲気である。

だが一応聞いておいたほうがいいだろう。

「あんた……管理局の人間かい……？」

「管理局？　なんだそりや？」

アルフは警戒したように聞いたがロックオンはすぐに聞き返してきた。

「悪いけど、気づいたらここにいたんですね。  
のか以前にここがどこだかもわからねえよ」  
その管理局がなん

ロックオンはやれやれと首を振りながら囁く。

「でも嘘をついているようには見えない。」

逆に困ったような、疲れたような表情をしていく。

この表情を見るにあそらく本当なのだろう。

しかしアルフはさつきの言葉に少し考えると一つの仮説を立てた。

「…もしかしたらアンタ、次元漂流者かもしれないね」

「次元漂流者?」

「何かの拍子で別の世界から跳ばされちゃった奴の事さ」

そう言われた後、ロックオンは少し考え込む。

「オイオイ…マジかよ…」

ロックオンはそれを聞いて少し落胆したがすぐに元に戻り気になつていることを聞いてみた。

「なあ… その次元漂流者つていつのまほ体も若返ったりするのか？」

「ハア？ 何言つてんだいアンタ……。人が若返るわけないだろ」

「（やつや そうだ）」

ロックオンの問いにアルフは呆れたように返した。  
ロックオンも内心ではあり得ないと想つていたらしい。

実際に体が若返つてしまつてゐるのだが、こんな話をしても信じてもらえるとは思つていないので、この話題はこれで終わらせることにした。

「それよりも、早くその子の手当てしないとな……で、俺も行つていいのか？」

「……まあアンタが嘘をついてるよつとは見えないし、一緒に手当してくれつていうなら止めな」

「サンキュー。他にもいろいろ聞きたいことがあつたからな… 助かるぜ」

「じゃあ行くよ。フロイトをしつかり連れてきておくれ

アルフはもうひとつ歩きだした。

「りょーかいつと」

ロックオンもバリアジャケットを解除し歩きだした。ちなみにバリアジャケットは、ロックオンが解除するイメージをしたら解除された。

ロックオンはアルフの後ろを歩きながらあることを考えている。

「（よくわからぬ）けど、異世界か……、とりあえず頑張ってみるか…」

ロックオン・ストラトス・ニール・ディランディは異世界で新たな一步を踏み出した。

## 第4話 初めての友達

「着いたよ、ロジーだ……」

歩くこと数分、アルフに連れられたロックオンはフォイトやアルフが住んでいるマンションに到着した。

「なかなか疲れたぜ……」

アルフが到着したことを伝えるとロックオンは疲れたといつもアピールする。

だが、疲れている様子はまったくない。

いつもの飄々とした態度は崩すことはなく汗を搔くごとに息一つ切らしていない。

「アンタ……すごいね、フォイトを背負つて歩いているのに息一つ切らしていないなんて……」

アルフは至極当然の疑問を口にする。

田の前の少年はフュイトと同じ年くらいだらう。

体格がほとんど同じなのでだいたいそうわかる。

しかし、田の前の少年はフュイトを楽に背負っている。

自分に同じ体格の人を背負って歩き、息も切らすなど言われると無理と言い切れる。

だからアルフはどうしても気になり聞いてみたのだ。

「…まあ体は昔から鍛えているんだ。力には自信があるぜ…」

ロックオンはいたつて普通に答えたつもりだがどこかバツが悪そりである。

「わうかい…」

アルフはロックオンの態度を見てこれ以上聞くことはしなかった。今の反応を見るに答えづらいことなのだろう。

人には聞かれたくないことが一つや二つあるものだ。  
だからこれ以上追及はしない。

アルフはこの話はこれで終わることによつて無言でマンショーンの中

に入つていつた。

ロックオンもさつきの話は血凝固に細かいことである。

とつあえず適当に答えておいたが気になる事には変わりない。

「つたく、どうなつてやがんだか……」

そう言つてロックオンはアルフが入つていつたマンションを見上げた。

よく見るとなかなか良いマンションである。  
そんな事をしみじみ思つてこるとアルフから呼ばれた。

「向やつてんだい、早く来なよー」

「おつと…やうだつたな

ロックオンはアルフの少し大きめの声に我に帰ると、ロックオンも中に入つていつた。

足を組んで座つてゐるロックオンに、アルフは頭を下げて感謝した。

「まずはお礼を言ひ。フエイトを助けてくれて本当にありがとうございました。」

ロックオンは今、ソファーでアルフと向かい合つてゐる。

フエイトの治療はアルフと協力して直ぐに終わらせた。

ロックオンのあまりの手際の良さ、治療の「まさにアルフが驚いたり、フエイトがロックオンの背中にしがみつきなかなか離してくれなかつたのはまた別の話。

フエイトは今、布団に寝かしている、治療が終わつた後、ロックオンが運んだのだ。

その感謝の言葉見るにアルフは本気でロックオンに感謝しているのだろう。

こんなに感謝された事があまり無いロックオンは恥ずかしそうに頬を搔いた。

「おいおい、目の前に危険な奴がいたら助けるのは当たり前じゃねえか……それに俺もそいつに助けられたんだ。それでおあいこにしねーか？」

「もうだつたのかい……それでも感謝してもしきれないよ、何かお礼を……」

「おーおー、いらねえよ、気持ちだけで充分だぜ」

アルフの言葉にロックオンは苦笑いでやつ笑つ。

「それより、あの化け物はいったいなんだつたんだ？あんな物、空想の産物だと思ってたぜ……。それにいきなり魔導師とか魔法とか言われてもピンとこねーし……」

ロックオンは疲れたらよつて溜め息を吐きながら言った。

「そういえばアンタ、次元漂流者だつたね。けど、なんでデバイスを持つていたんだい？」

「わからねえ。何故か首にぶら下がつてて後はコイツの指示に従つたんだからな…。デュナメスはなんかわかるか？」

アルフの問いにロックオンはわからないと返す。

あの時の事を思いだしながらデュナメスに聞いてみる。

『すいません。私も気がついたらこうなつていまして』

「……そつか

デュナメスの言葉にロックオンは難しい顔をする。

だが、わからない事はわからないので、直ぐに切り替えアルフに視線を向けようとしたりで……

「へ…ううん……」

「…」

後ろからフェイントの声が聞こえた。この声に反応したアルフが直ぐにフェイントのもとに向かう。

「フェイント…… 気がついたのかい！？」

アルフは涙目でフェイントに聞く。

フェイントは少し周りを見渡すと笑顔でアルフに返す。

「……うん。もう大丈夫……。だけど何で家に……？」

「あいつが運んでくれたんだ。フェイントの治療も手伝ってくれて……」

アルフはロックオンの方を向きながら言ひ。

「あなたは……確か……」

フェイントは思ひだした。目の前にいる少年を。自分が助けて、そして助けられた少年の事を。

「一回やつたが改めて自己紹介だ。

俺はロックオン・ストラトス。成層圏の向こう側まで狙い撃つ男だ

ロックオンは何時もの調子で、昔刹那に言つた時のよつて自己紹介した。

「ふふつ……」

「…何で笑う?」

「『』めんなさい。

ロックオンってなんだか面白い人だと思つて」

「おいおい、初対面の人にはそりやねえだろ……まあいいか……」

ロックオンの自己紹介にフェイトからついつい笑いが零れてしまつた。

ロックオンの自己紹介はつづいて子供には分かりにくいが、精神年齢が高いフェイトには理解できた。

凄く自信満々に、真顔で有り得ない事を言つているのだ。

フェイトにはそれが面白くて、自分を助けた時のギャップが激しそぎてついつい笑つてしまつたのだ。

ロックオンはいきなり、笑ったフェイトをジト目で見るがすぐに諦めた。

フェイトの笑顔を見ると怒る気が失せたのだ。何故だかはわからぬが。

「（フェイトがあんなに楽しそうに笑うなんて…）」

アルフはフェイトとロックオンの会話を聞いていてそう思った。  
あんなに楽しそうなフェイトは初めて見た気がする。  
それだけフェイトはロックオンと楽しそうに話しているのだ。

そんなことを考えていると何時の間にかフェイトの自己紹介になっていた。

「私はフェイト、フェイト・テスター・ロッサです」

「あたしはアルフだ」

フェイトとアルフは自己紹介をする。  
実際に簡単な自己紹介なので2人とも話すのはあまり得意じゃないのだろう。

「それじゃあフェイト、アルフ、聞かせてくれないか」の世界の事を……」

ロックオンは急に真剣な表情になり2人に言った。

アルフはフェイトにロックオンが次元漂流者だということを話すと、そのまま話始めた。

ロックオンは聞いた。

管理局、次元世界、ミッドチルダの事。

そしてここが地球の日本だということ。

魔法のこと魔導師のこと、そしてジュエルシードのこと。

正直信じられないことばかりなのだが、この2人が嘘を吐いているとは思えないのに、いちおう信じる事にした。

あらかた話し終えるとロックオンは疲れたように溜め息をする。

あまりにも凄い話で、頭が疲れてしまったのだ。

「（それでも、ジュエルシードとかのつを集めるためとは）

え、こんな子供……しかも女の子があんな危ねー戦いするとはな。  
俺達の世界じゃ考えられねえぜ……ん? ジュエルシード……  
? )」

ロックオンはふと何かを思い出すとフロイドに聞いてみた。

「なあ、ジュエルシードって、もしかしてこれが?」

ロックオンはデュナメスから戦つた後に落ちていた青い宝石を出した。

「ロックオン!! それだよ、ジュエルシード!!」

「あんた、それをどいでー?」

2人が大声で詰めよつてくる。

ロックオンは少し驚いたが、すぐに説明する。

「あそこには落ちてたんだよ…。とりあえず捨ててきたんだ」

「あらこえば……ジユエルシードの！」と呟れてた……」

ロックオンが説明した後にアルフは思ひだしたようになくな  
フュイトの事で頭がいつぱいですっかり忘れていた。

「おこおこ、……まあこか、せりふ」

ロックオンはフュイトに  
何かを投げた。  
フュイトは慌ててキャッチする。

「これって……」

「欲しかったんだり？ やねね」

フュイトがキャッチした物は、ジユエルシードだったのだ。

驚いているフュイトにロックオンは囁く。

「だけど……いいの？」

「気にはすんな、俺には必要ねえからな」

フェイトは未だに困惑つていて、ロックオンにおずおずと聞くが、ロックオンは親指を立てながらあっけらかんと返した。

「…………ありがとう、ロックオン」

「いいいってことよ」

フェイトは笑顔でロックオンにお礼を言つた。

ロックオンも笑顔で返す

「おっと……俺はそろそろ帰るぜ。いろいろ話してくれてありがとうよ」

ロックオンは立ち上がりながら一人に言つた。

それを聞いたフェイトの表情が少し曇つた。

アルフはフェイトの微妙な表情の変化に気づいた。そしてフェイトの気持ちの変化も感じとった。

魔導師と使い魔は精神がリンクしているので、アルフにはフェイトの気持ちが流れて来たのだ。

もつと話がしたい、一緒にいたいといつ気持ちを。

「……うん、一緒に話せて楽しかった。またね……」

フロイトは明らかに無理して笑顔を作りロックオンに囁いた。

アルフはさじてかしょいと考へる。

フロイトに寂しい思いなどさせたくないのだ。

「（マズイ！　なんとかしないと……あ……）」

アルフはあることを思い出した。

「あんた次元漂流者だろ？　ビート帰るつていつんだい……？」

そう、ロックオンは次元漂流者なのだ。  
帰る家などあるはずもない。

「ビート……野宿するに決まつてんだい？」

アルフの真面目な意見にロックオンは当然のことのよつ野宿すると  
囁く。

「だ、だつたら家に住みなよ。子供が野宿なんて危険過ぎるしね

「……気持ちはありがたいが、そこまで世話になるわけにはいかねえよ」

アルフの提案にロックオンは眞面目な顔でそう言つ。 どうしたものかとアルフが考へてみるとフュイトがロックオンに呪つた。

「ロックオン、私たちはそんな事気にしないから

「……けどな……」

フュイトの言葉にもまだ渋るロックオン。  
セレオまでされると申し訳なくなるのだ。

アルフは最後の手段とばかりにロックオンに近付くと耳打ちした。

「頼むよ……あんなに元気なフュイトは久し振りなんだ」

「……どうこの意味だ？」

「最近元気なくてさ、食べ物もほとんど食べてくれないんだ、あんたといふるとフュイトは楽しそうなんだ。だから……」

「わかった」

アルフの泣き声にならながらの言葉を途中で遮りロックオンは言った。

「俺が必要だつていうなら喜んでお話をになるぜ」

それを聞いたアルフとフロイトは笑顔になる。

「ロックオン、ありがとよ~。」

「お~お~、世話になるのはいつだぜ?」

ロックオンは呆れながら言つ。

「そんじやまあ……よろしく頼むぜ」

やつれてロックオンは手を差し出す。

「えつ？」

いきなりの「」とて困惑のフロイト。

「握手だよ、握手」

「ううん、よしへく」

フロイトはロックオンの手を握つて挨拶した。

「やつだ、俺の本名はニール、ニール・ディランディだ」

「えつ、じゃあロックオンって？」

「ロックオンは「コードネームだ、これからダチになる奴に「コードネームは失礼だからな」

「ダ……ダチ……？」

ロックオンの言葉にフロイトは困惑してくる。

「嫌か……？」

ロックオンは少し落ち込んだ感じで聞く。  
心なしか不安な表情をしている。

「ち……ちがうよ……嫌とかそういうのじゃなくて、ここにいるのって  
初めてで……どうしていいかわからないんだ……」

ロックオンの言葉にフェイトは焦りながら返す。

「実は俺もだ」

「…………え？」

「俺もいろいろあってな、友達なんかいたことないんだ」

そつ、ロックオンは両親を失った後、自分とライルが生活するため  
にずっとスナイパーをやってきたのだ。ソレスタイルビーリングは  
友達というより仲間という感じである。

フェイトも人見知りで内気な性格で、アルフも友達というよりお姉  
ちゃんという感じだ。

お互に友達といつ単語が新鮮なのだ。

「私、ロックオ…じゃなくて、ニールと友達になりたい。だけど、友達ってどうやつてなるか……」

「…………やうやうのつて、どうやつてなるかじゃなくて自然となるもんなんじやねえか?」

ロックオンはフェイトに静かに言ひ。

「お互いがなりたいつて思つてんなら、それで充分じやねえか」

ロックオンは笑顔になつてフェイトに言ひた。

その言葉を聞いて、今まで黙つていたアルフが2人に言ひ。

「やういえば……困つた時に助け合つのが友達つて聞いたことあるよつな……」

アルフの言ひた言葉でフェイトは納得した。

自分とニールは既にお互いに助けあつてゐる。  
友達といつのは困つた時に助け合う存在。  
それなら自分の答えは決まつてゐる。

「わかった。改めてようしきね、ニール」

「おう、よろしくな」

改めて2人は挨拶した。さつきよりもスッキリした顔をしている。フェイトは余程うれしいのか少し涙を流している。

「フェイト……」

アルフはそんな2人を見ながら微笑んでいる。

そして、ロックオンがフェイトから離れるとアルフに近付く。

「あんたもよろしくな、アルフ。これから世話をなるぜ」

「よろしく頼むよーーール」

こうしてロックオンはフェイトと友達になった。  
そしてしばらくフェイトの家に住む事になった。

## 第4話 初めての友達（後書き）

なんか最後のほう、何が言いたいかよくわからなくなつた。

やつぱり難しい  
…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8973x/>

魔法戦記リリカルOO～不滅の狙撃手～

2011年11月24日19時48分発行